

特集によせて

常木 晃

Editorial Foreword to the Special Issue

Akira TSUNEKI

本誌『西アジア考古学』では、創刊号から続けて特集を掲げてきた。この特集は基本的に、日本西アジア考古学会が毎年行っているテーマを定めた定例研究会の成果に関して、各発表者やそのテーマと関連する研究者に原稿を依頼し、それをまとめるという形で組まれてきた。今号の特集の題材となるべき2006～2007年にかけての研究会は、本学会の十周年記念事業である「編年」をテーマとした3回の連続シンポジウムとして執り行なわれたが、この成果については、すでに2007年6月に『西アジア考古学の編年—日本の考古学調査団からのアプローチ—』という小冊子となって本学会から出版されている。そのために会誌9号の準備段階で、何を特集のテーマにするべきか、特集自体の存在意義をも含めて、編集委員会で議論を重ねた。そして編集委員会が出した答えが、本特集「西アジア考古学この10年」である。その趣旨は、本学会が設立されてからのこの10年間になされた西アジア考古学をめぐる調査や研究などのうち、最も重要で印象深いものを何人かの専門研究者に分担して紹介してもらおうとするものである。それが本学会の十周年記念事業のひとつともなればとも考えた。研究者への原稿依頼を年代別にするか地域別にするかでも議論があったが、研究状況に鑑みて地域割りを優先することにした。各専門研究者に原稿依頼するときに留意した点は、紙数の関係もあり、各地域の考古学最新情報の全てを網羅的に紹介するのではなく、各人が考えて最も重要であるかまたは最も関心をもった調査・研究に絞って取り上げてほしいとしたことである。また、日本隊の調査成果をことさら取り上げないこともお願いした（発掘調査報告会でその成果は十分に私たちに伝えられている）。そのようにすることで、西アジア各地の考古学で今何が話題になっているのかがより鮮明に浮かび上がると考えたからである。したがって、この特集に各地域の網羅的な紹介を期待した読者が裏切られるのは、各執筆者のためではなく編集方針のためであることを理解されたい。

集まった原稿に目を通させていただくと、一口に西アジアといっても、それぞれの地域によって大きく研究・調査の関心や進展状況が異なっていることに気づかされる。それはそれぞれの地域を担当していただいた各研究者の関心が異なっていることも一因であるが、それだけではなく地

域の持っている歴史的な背景の違いや、また現代の政治状況の違いも大きく影響している。

「トルコ考古学この10年」を寄せてくださった三宅裕さんは、大きく3つのテーマを取り上げて紹介している。まず、トルコに北接するグルジアのドマニシ遺跡の発見から人類の最初の出アフリカに関する解釈が大きく変更される可能性があり、それがまたトルコの前期旧石器時代研究に大きく影響する可能性があることを指摘した。第2に、アナトリアのみならず西アジア全体の新石器時代観を大きく変えてしまった衝撃的なギョベクリ遺跡の発掘調査とその研究を手際よくまとめている。そして第3に、ビザンツ時代の主要港であったテオドシウス港で24隻もの沈没船が発見されたというホットなニュースを紹介している。トルコでは過去にもまして、この10年間ますます考古学は隆盛を迎え、行政発掘、学術発掘とも、様々な分野で調査研究が進展しているようだ。西アジア諸国に色濃い考古学と自国民のアイデンティティーという問題ともほぼ無縁に、この国の考古学の調査研究はきわめて健全に進められているように見える。

足立拓朗さん執筆の「イランにおける最近の考古学的調査の進展」は、編集者の意図とはやや異なるが、旧石器時代からイスラーム期までの多岐にわたる調査・研究についての丁寧な解説となっている。驚かされるのは、イスラーム革命以来困難な状況におかれていたイラン考古学が1990年代から活性化し、現在では年間250件以上の野外調査が実施されていること、特に2000年以降は外国の調査隊がイランで調査活動を再開していることである。イラン考古学のひとつの特徴は、イラン人自身が主体的に調査研究を進めていることにある。旧石器時代研究のビッグラリー氏や、新石器時代～青銅器時代研究のアリザデ氏、ファーゼリ氏、ササン朝研究のアザルヌーシュ氏ら、各時代の研究を主導している著名な研究者らがいて、彼らに続くイラン人若手研究者たちも育っている。徐々にではあるが、イランのフィールドに戻ったり、自身の調査研究の中心をイランに据える外国人研究者も増えつつある。イラン考古学の将来は明るい。

この10年で、西アジア考古学のみならずおそらく世界の考古学の中で最も過酷な調査・研究状況に置かれている

のがイラクであろう。小口裕通さんが執筆された「メソポタミア考古学研究の近年の歩み」には、悲痛な叫びが満ちている。外国の調査隊は現在、イラクで全く調査をすることができず、同国内での調査研究はイラク人自身によるものが細々と実施されているのみである。しかもその情報が外国の研究者に伝わることすらも困難な状況にある。それでも、小口さんが書かれているように、私たちに伝えられたイラク人研究者たちによる調査のなかには、初期王朝時代の保存の良い円形建物が発見されたテル・エン・ネムルや、古バビロニア時代の粘土板文書が発見されたシシーンなどでの重要な発見、研究がある。欧米の研究者たちの仕事は、湾岸戦争以前に行われた発掘調査成果を基盤としたイラク国外での整理研究にいきおい限定されてしまうが、将来的な調査研究を見据えて、そうした基礎研究が黙々と続けられていることを小口さんは伝えている。特に土器の編年研究の中に見るべき成果があるようだ。

宗莖秀明さんの「近年のペルシャ湾岸地域の研究動向」は、メソポタミアとインダスという青銅器時代の2大先進地を繋ぐ役割を担ってきたペルシャ(アラビア)湾岸地域の考古学研究の歴史と現状、そして展望をまとめている。メソポタミア研究の延長に過ぎなかった湾岸の考古学研究が、1980年代にアラビア海世界と関連した文明研究へと大きく進展したが、ここ10年では新たな資料の出土や研究の展望を欠いているという。バハレーンでは、カラートゥル・バハレーンやサールといった著名遺跡の発掘調査報告書が刊行され、それに関連した研究が進行している。オマーンでは、前3千年紀末～2千年紀初頭にかけて直径40mを超える周壁が出現しハラッパー式の分銅などインダス文明との強いつながりを示すテル・アブラクの調査が注目されている。湾岸地域の青銅器時代では、交易などとかく外部との交流ばかりが強調されるが、湾岸地域内の内的な交流をも視野に入れないと全体の文化的把握ができないという指摘は、大変示唆に富んでいる。

南レヴァント地域を担当していただいた杉本智俊さんは、特にイスラエルで行われている2分野4つの調査について紹介している。第1の分野はイスラエルの建国と密接に関連したエルサレム「ダビデの町」にかかわる発掘調査についてであり、「ダビデの王宮」と推定され得る紀元前10世紀にさかのぼる大型の公共建造物や、それより古い時代からやはりダビデの時代まで続くとされる「防御・水利施設」などが発見されていることを紹介し、統一王国時代のエルサレム理解に大きく貢献するとともに、これらの考古学データを説明できる考古学的モデルを構築すべきことが説かれている。第2の分野はキリスト教関連遺跡の調査で、ローマ時代の「シロアムの池」の検出とメギドのキリスト教礼拝堂の発掘成果が説明されている。第2分野の

キリスト教関連遺跡の調査がイスラエル政府考古局によって実施されるようになったことから、杉本さんは現在のイスラエル考古学がユダヤというイデオロギーから解放されるつつあることを示すものと主張している。先史考古学を除いて、これまで常にユダヤナショナリズムと密接に結びついて発展してきた歴史をもつイスラエル考古学が本当に変わりつつあるならば、考古学や歴史学のみならず現代社会にも好ましい影響を与えるに違いない。

エジプトについては、高宮いづみさんが「エジプト先王朝時代研究のこの10年」を執筆された。高宮さんの専門でもあり、エジプトでの国家形成の研究にとって避けて通れないナカダ文化をはじめとする紀元前4千年紀の先王朝時代についての最新の調査研究状況の概説である。同時代研究の定番遺跡とも言えるヒエラコンポリスとアビュドスでは支配者の墓地が調査され、当時の支配者たちの富と権勢を示す遺物から、彼らの実体が明らかになりつつあると言う。集落址の調査では、生産や専門化を考察するための重要な資料が得られている。下エジプトでも先王朝時代の調査は進展中で、特に注目すべきはプトの紀元前4千年紀半ばの文化層で南レヴァントとの密接な関係が指摘されたことであろう。エジプトの「起源」に関わって、調査研究と理論の融合が図られ、政体統合のプロセスが解明されつつあるようだ。

本特集の読者は、西アジア各地域の考古学で関心を集めている事柄を知り、新たな学問状況に思いをいたしていただけることと確信している。それとともに、西アジアと一口に言っても、それぞれの地域に固有の事情があり、調査研究には政治的経済的なバックグラウンドや国際関係も大きく影響していることに改めて気づかざるを得まい。それにつけても、2004年11月のアメリカ大統領選挙のときに見た光景を私は忘れることができない。その時に私はたまたまシカゴ大学オリент研究所に滞在していたのだが、ブッシュ大統領の再選が決まりオリент研究所の面々は一様に押し黙って頭を抱えてしまったのである。これでまた自分たちがイラクに調査研究に行く道が遠のいてしまったと、うめき声を上げる研究者もいた。あれから早4年、またアメリカ大統領選挙の年となった。政治経済のくびきを乗り越えて、一刻も早く研究者たちが自由にどこの国でも活動できるようになることを祈らずにはいられない。そして小口さんも書いておられるように、困難ななかでも懸命に責務を果たしているイラク人をはじめとする西アジア各地の考古学研究者の奮闘に、心よりエールを送りたい。私たちは、彼らの情熱に思いを馳せ、彼らとともに歩んでいきたいと切に願っているのであり、本特集の読者がそれに共感していただけることがあるならば、望外の喜びである。